
砂糖と雑巾

お空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂糖と雑巾

【Nコード】

N7551Y

【作者名】

お空

【あらすじ】

「甘いもの」が大嫌いなカンナ。そんなカンナの最愛の彼氏は喫茶店で働いている。しかしある日、彼氏の浮気が発覚。色んな想いを抱える中、一番のショックに気付いてしまい…。

甘さは求めない（前書き）

一文でも読んで頂けるだけで、幸せです。

甘さは求めない

「嫌い」

カンナは、目の前に出されたショートケーキに向かってつぶやいた。
「え」

友人が驚いてカンナを見る。

無理もない、喫茶店でショートケーキを頼んだのはカンナ自身なのだ。

「あ、いや」

陽子の驚くような視線に耐えられず、ゴメンと軽く謝った。

「ビックリしたあ、イチゴの乗ったショートケーキは嫌いだったんだ！イチゴのあるのと

ないのとじゃ全然違うもんね。私はイチゴが乗ってる方が好きだけど」

「まあ」

「メニュー表に、写真1つ載ってないって、ある意味異常だよね」
陽子が手書きの可愛いメニュー表を手に取り、思ってもないことをフォローした。

*

私は、甘いものが嫌いだ。

——山本カンナ

「名前を漢字に当てはめるとしたら、“甘奈”でカンナじゃない？」
などと友人にほざかれた時は吐き気がしたほどだ。

目の前に出された白く輝くショートケーキ。ホイップの頂上には真っ赤なイチゴ。

——大嫌いだわ！

とは言え頼んだのは私である。

頼んだ理由、それは恥ずかしい限りなので詳しくは言わない。

だけど、私が食べるためではなく、…誰かのため。

陽子はコーヒを一口飲んで、私のくそ不味いショートケーキより一際デカいガトーショコラを崩す。

「うまそう！」

へえ、そんなに好きなのか。

私はつい陽子をじっと見てしまう。

ガトーショコラが口に運ばれた。

「美味しい？」

「めっちゃ美味しい」

陽子が笑った。可愛いな、と思う。

その瞬間、私の心のどこかがキュッと響いた。

甘さは求めない2

「この店良いね」

私が連れてきた喫茶店は、“優香”という小さな店を陽子は気に入ったようだった。

「そうかな？ ケーキ食べないから分かんないけど、私は好きだよ。この店」

コーヒ―（もちろんブラック。ミルクなど入れない）はかなりレベルが高いと思う。

「だよね」

陽子がふつと笑う。長い髪は今日も枝毛なく美しい。胸元の小さなネックレスは彼女の艶かしい肌に映えて、大人っぽさを演出している。その反面、顔や言動はちよつと幼い。まだ反抗期をぬけてないような――。

「ウチになんかついてる？」

ハツと我に返る。

私は、陽子にうつとりしてしまった。

「ついてる」

「うそっ！」

陽子が鏡を取り出す。

「嘘」

「もおー」

私なんかより、陽子は百倍、良い女だなと思う。こんな、肩にタトゥーシールを貼ってるような私なんて足元にも及ばなさすぎる。

ヒールがいくら高くても、陽子には届かない。

雑談に花が咲いてると、若い男性のスタッフが私たちのテーブルに来た。

陽子が不思議な顔をする。あどけなくて、また私の心を締め付ける。

「店長から、特別にデザートをどうぞ」

若いスタッフは言う。結構カッコイイ。バイトだろうか。茶髪の髪は今どきつぽくて、鼻が高い。

唇がセクシーで吸い寄せられそうだ。

「本当ですか！ありがとうございます」

嬉しそうに陽子がお礼をした。

私は足を組かえて、デザートを眺める。

餅、だ。

若いスタッフが去ったのを確かめて、私と陽子は目を合わせる。

「ぶっ…餅…」

吹き出す陽子を見て私も口を押さえて笑う。

それは、白い皿に丸餅が二つ乗っていた。醤油で焼いてあるようだった。

私は、小さな店内を見回した。

厨房に繋がる入口の方から、熱い視線を感じた。

「カ・ン・ナ」

男の人は唇だけ動かして、私にあたたかい微笑みを送る。

キュン、と胸が弾む。

苦しいと私の脳は訴える。

幸せにまみれて、甘いものを嫌う、私の脳が。

その男の人に笑顔を返した。

「どうしたの？」

陽子が見る。

「うっん。なんでもない」

「そっか」

「うん」

「カナナ餅食べる？っていうか餅は食べれるの？」

「うん！食べる」

店長から特別に頂いた餅を見て笑みがこぼれる。

この店の店長は、——私の大切な人で、彼氏である。

*

我儘は欲情

「今日は、ありがとう」

「こちらこそ」

コンビニ前で、陽子と別れる。

今日は元々、陽子のショッピングに付き合っのがメインだった。

「ねえっ」

私はつい、陽子を引き留める。

「ん？」

振り返る彼女は美しかった。空は暗くて、コンビニから漏れる照明のおかげで姿が確認できる。

無駄に明るい、コンビニの汚ない照明に照らされても美しい陽子。

「陽子はカレシとかいないの？」

思い切って投げ掛けた質問に陽子はふっと笑って、

「いないよっ」

そう言っで、手を振って帰っていった。

私は携帯を開いて、時間を見た。メールが一件届いていた。

差出人は店長——隼人からだった。急に嬉しくなる。

“いつもの公園で待ってる”

受信が三十分前だったから、走って待ち合わせ場所に向かった。

「よっ」

小さな公園には隼人がベンチに座って待っていた。

「遅くなってゴメン」

「いいよ。今日、店に来てくれたんだし」

隼人の優しさに、私はいつも溶けそうになる。

「…餅…ありがとう」

「ははっ、あんなんで悪いな。カンナ、餅なら食べられると思ってさ」

「隼人…」

感無量というところだろうか。

この人とずっと一緒にいたいと思った。

「また来てな」

「うん」

もちろん、と言って、隼人を抱きしめる。

ギュツと重なりあう体から、体温が伝わる。

私が体を離して隼人の顔を見る。

——ばか。私のことスキって、書いてあるわよ。

そう思ったのと同時に、唇が触れる。

甘いのは嫌い。

甘ったるいのはもつと嫌い。

だけど、隼人との甘いキスは好き——。

我儘だって分かっているけど、ずっとこの柔らかい唇に触れていたという気持ちの方が遥かに強くて、私たちは長い間キスをしていたと思う。

「…カンナ。どうした？」

「えっ？」

「いつもよりカワイイ」

「…ばか」

愛しくて仕方ない。

「今夜、家来る？」

「うん」

誘いが嬉しくて、今度は私から深いキスをした。喫茶店で働いている隼人の舌は、甘かった。きっとケーキでも試食したのだろう。

甘さより、私は舌の感覚に夢中であった。

まさに、幸せの絶頂だった。

いつか終わりがくるなんてフレーズは、一文字も浮かんでこなかった。

た。

甘いキス

「カンナ」

隼人が私の名前を呼ぶ。

行為を終えた私たちは、ベッドで横になっていた。

「なあに」

手を頬に当てて、腕で逆三角形を作る隼人が微笑む。

「好きだよ」

「あたしもだよ…今日だって友達が隼人の作ったガトーショコラ美味しいって言って、笑顔になってたの見て嫉妬しちゃった」

「何だよそれ」

隼人が吹き出す。

「何であたしは甘味が嫌いなんだろう…」

「関係ないよ。カンナはカンナだし、そんなこと問題ないだろ」

そう言っただけで私のおでこにキスをしてくれた。

「でも、ショートケーキ頼んだからね。食べれなかったけど…写メは撮ったからね」

「十分だよ」

私と隼人は5秒くらい見つめあった。

「いつか、俺にケーキ作ってよ」

隼人は確かにそう言った。私の本音はとんでもないと思ってしまった。何故、嫌いなものを自ら生み出さなければいけないのだ。そんなことを思いながらも、

「うん」

と私は一応、応えた。

「やった。やっぱり良いよな…彼女の手作り」

嬉しそうにする彼氏を見て、私は作ってみても良いかなと思った。私のつまらない愚論なんかより隼人の喜ぶことをしてあげたい。それが、何よりだった。

「愛してるよ」
再び抱き合ったのは、言うまでもないだろう。

*

誰かが、私にキスをしている。
私は寝たフリをしているみたいだ。
得体の知れないそいつは、ソファの上に仰向けになっている私の横にいた。決して上から襲いかかっているわけではない。そいつの足はピカピカなフローリングに膝立ちしているようだ。

軽く唇が触れる程度が、段々長くなる。しまいには舌が入ってきそうでならない。

案の定、私の口の中に何かが侵入してきた。
甘い。

吐き出したくなる。

世界で一番、嫌いな味。

一体、私の中で何が起きているのだろう。
そんなことよりとにかく、この口の中を誰かどうにかしてほしかった。

キャラメルはお断り

しかし、そいつの正体が分からない。

誰だろう、こんなことをするのは。隼人だったらかるうじて許してあげようか。

そんなことを思っているとそいつが、やっと顔を離した。

それなのにまだ私の口内には大嫌いな味が残っている。

舌ではなかった。

じゃあ、何だろう。

いくつもの疑問が浮かび上がる中、それは食べ物だと分かった。

そいつの顔が見えた。

綺麗な長髪。

胸元のネックレス。

そいつは、ふつと微笑んだ。

笑うと意外に幼い顔。

美しい女性。

——陽子だった。

「カンナ」

陽子は私の名前を呼んだ。

私の内ももにスラッとした白い手が置かれていた。そのことについては気にならなかった。口の中に含まれている甘い物を一刻も早くどうにかして欲しい。

「えっ——」

*

「カンナ」

目を開けると、隼人がいた。

「陽子？」

何が起きたのか分からない。

私は陽子を探した。

「ちげえよ」

隼人しかいなかった。

寝ぼけすぎ、と隼人は笑う。

夢…、かぁ。久しぶりに見た。

「あ…隼人だ」

よく見ると、というか上半身裸だった。そうか、あの後私は寝ていたんだ。全てを理解できた。

「俺だよ」

また隼人はバカにして笑う。

「もう」

そうは言いながらも嬉しかった。…夢で良かった。

「カンナは可愛いな」

「だから…」

言いかけた時、隼人は私を抱き寄せキスをした。

キスの後、隼人の上半身を見た。ふと窓をしてみる。

空は青い。嫌になるほど平和空だった。しばらく空を眺めた。隼人は服を着ようとしていた。

——って朝じゃん！

マジかよ。時計は7時を指していた。

「モロ朝帰り…」

呆然とする私を隼人がギュツとする。

「良いじゃん、初朝帰り」

「うん…」

家に帰ると、鍵が閉まっていた。わー、わー、どうなるんだろう、などと思ってみる。

誰もいなかった。良かった。

隼人の家での不安さが馬鹿みたいだ。

何で不在なのは深く考えないことにした。すぐ帰ってくる気がしたからだ。昨夜帰らなかった言い訳を考えようとした。

リビングの白いソファにドサツと倒れ込む。

この感じ、やっぱり我が家。

ピカピカのフローリングにハンドバッグをテキトーに置く。

あの夢を思い出してしまった。

言い訳よりもあの夢のことについて自問自答させ、二度と思い出さないようにしよう。

このままじゃ、あの夢を思い出す度可憐な陽子と会話が弾まなくなりそうだ。

目を閉じてみる。

陽子が、私にキスをして、キャラメルを口移しする――。手の位置も何だかいやらしい意味が込められている気がした。まだ興奮状態な頭を整理させて、分かったことが1つ。

あの甘いやつはキャラメル。

おえっ…最悪。

夢にしては味を鮮明に覚えている。よほど衝撃的だったのだろう。

姉弟

ボーっとしていると、鍵を開ける音が聞こえた。
誰か帰ってきたようだ。

「ただいま」

弟だった。弟の守は高1の派手な方でイケてるらしい。（もちろん友達談）。

「守、朝帰り？」

ソファから飛び起きると守が即座にツッコむ。

「ねえちゃんもだろ」

「うっさいな」

あ、そうか、と思った。

「って牛乳ないし」

冷蔵庫をさっそく開く守が舌打ちをする。

「知らんわ。で、彼女と上手くいってるんだ」

「うっさいな」

守は私がついさっき言った口調で真似した。

「何よ」

可愛くない弟ね、と思いながら再びソファに倒れ込む。

「母さんいないね」

守が麦茶を飲み干して言った。

「…そうだね」

私も思っていた所だった。

「俺らと同じことしてたりして」んなわけねえな、と守が1人で笑う。

「えっ？まさか昨夜からいないの？」

てつきり、早朝に出掛けたのかと。

「多分な」

「確かに、電話も来てないし…」

いつもなら、帰らない日は電話がかかってくるはずだ。

「マジかよ」

守は平常を装っていたようだが、声色が焦っていた。

「もしかして守も電話来てない？」

「ああ。ねえちゃんに来てたんじゃないのかよ？」

「メールすら来てないわよ」

顔を見合わせる。

「とつとにかく、いま電話してみようぜ」

「うん」

守が携帯を開く。私は守の隣に行つて、通話を聞こうと思った。

プルルルル…

なかなか出ない。

「なあ、もしかして…」

守が急いで寝室に向かう。

「どうしたの——」

母さんの携帯がポツンとベッドの上に置いてあった。

頼る私はsweet? (前書き)

わけのわからんサブタイトルになってしまいました。
すいません。

頼る私はsweet？

「どこ行っただよ…」

守がビックリしている。

母さんが携帯を持たずに出掛けるなんて珍しい。

しかも、昨夜から帰ってないとのことだ。

「男の所に…？」

この家に父親はない。幼い頃に、不治の病を患い、病死した。そんなドラマチックな死に方だったらしい。

母さんは私と守のため、必死に働き、育てた立派な母親だと、私は思う。幼い頃から変わらない手作り料理も私は尊敬している。

「…守」

「何だよ」

「母さんを信じよう」

守は深くうなずいた。

「もし、悪い結果になっても、受け入れよう？」

「悪い結果って…」

私の言葉に意味が理解できない守は、イラだちを感じたようだ。

「父さんの元に行っちゃってもってこと」

感情を押し殺したように言っただけだったが、声が震えた。

守は私の気持ちを読み取ったようで、

「ああ」

と答えて、守は優しい眼をして母さんの携帯を自分のポケットに入れた。

*

「大丈夫？」

幼馴染みの星野菜々子が私の顔をのぞきこむ。当然だ、私がうつむ

いているのだから。

「ああ、うん……」

昔から付き合いのある、菜々子に事情を全て話した。

朝帰りしたあと、母さんがいないこと――。

「カンちゃんのお母さんがそんなことになるなんて……珍しい」

菜々子が言った。やはりか。

“そんなこと”にもまだなっていないレベルだけど、これから“そんなこと”になる可能性は大いにあるわけだ。

そこで、大事にもならなくても、ああだこうだ言われない幼馴染み、菜々子に相談した。

それに、菜々子なら何か有力なアイデアが浮かぶかも知れない。そう思った。

当初は陽子に相談しようと思っていた。

ただあの夢が邪魔をする。気まづかった。顔を見れない気がした。私はちっぽけな女だ。

自由人とは私のこと

菜々子は女の子らしい。

肩くらいまでのおろした髪はふわふわで、雰囲気はおっとりしているが、頭が冴えている。

現実的で意見が的確。菜々子がどんな子かと聞かれたらそう答えるだろう。

陽子のお姉さんらしい容姿に対し、菜々子は妹っぽい感じだ。

だけどころと女性らしい雰囲気は持っている、私なんかより素敵な人だと思う。

菜々子のお父さんは社長さんで、お母さんは厳しくて、怒ってばっかなのに綺麗で、最後は抱き締めてあげる——、そんな良いお母さんがいるという印象も強い。

母さんも素敵な人だ。

家事、子育て、仕事、人格。

子供は親を見て育つとよく言っけれど（まさしく菜々子がそうである）。

私はあんな立派な母親がいるのに、——いつまでフリーターなんだろう。

「…で、カンちゃん結婚願望あるんだよね？」

菜々子が私の顔を伺う。

「え、…あ、ああ、うん」

実に曖昧すぎる。不安定にうなずいた。

「カンちゃんはいいいダンナ見つかるんだろうな」

ほんわかった口調で菜々子が言うので、つい微笑んでしまう。

それと反対にこのままが続くのもナインじゃない？とも聞こえる。

考えすぎかも知れないが、私も就職しなきゃいけないんだな、と頭では分かっている。

「まあね。菜々子はどうなの？」

「順調よ」

全てを一言で片付けた菜々子をうらやましく思った。

「マジで？」

「男はキープ中だし、お仕事もうまくいってる。おかげさまで」

菜々子はニツと笑って、ピースをとった。

「良いなあ」

私は言った。本音である。

その後、ファミレスのハンバーグを食べながら、話に花が咲いた。本当に菜々子は良いコだなあ、と改めて思った。

将来に関しても、自分に対してもしっかり考えを持っていて、まるで非がないといっても過言じゃないな、と感じた。

家では守が待機しているので、安心しきっていた。

飴が落ちた瞬間

菜々子とファミレスで別れると、自宅へ向かった。
もしかしたら母さんが帰ってきているかも知れない。
そう思うと、駆け足になっていった。

家の前に着くと、いつもと違う感覚を感じた。

母さんが帰ってきていますように。

ドアを開けようとした。

開かない。

ガチャ、ガチャ、という音が響く。まさか。すぐにインターホンを押した。

ピンポンとこちらにも聞こえた。しかし返事がない。もう一度押しても結果は変わらず、計5回鳴らしてみたけど誰も出ない。行くときは鍵を開けていた筈だ。守が閉めたのだろうか。中で倒れているとか。

とにかく電話しようと思い、携帯を開いた。

プルルルル…

呼び出し音が鳴る。

『ねえちゃん？』

守が出た。無事、生きていたようだ。良かった、と安心した。

「そうよ。さっさと鍵開けて！」

『わり、俺今彼女ん家』

——全然良くない！

「はっ…はあ？」

この馬鹿弟は一体何してんだ、母親がいなくなったのにも関わらず呑気にイチャついてんのか。

『ねえちゃんこそどこ行ってたんだよ』

まるで反省しようとも思っていない。

「菜々子に相談しに行ったのよ！直接行った方が真面目に考えてもらえるでしょ」

『電話で良いじゃん。俺遅くなるから』

その瞬間ツー、ツー、ツーと鳴った。切りやがった。しかもこのタイミングで。

守が留守の間、鍵は閉まっていた。その間に母さんが帰ってきていたら――？

えらいこっちゃ。

とりあえず、家の中に入ろうと思って鍵を探した。

ネコのマスコットをつけている鍵を、バックの中に手探りで。

「あれ？」

鍵がない。

バックの中に鍵がなかった。

家の中に置きっぱなし…。

守は夜遅く帰ってくるらしい。今は14:00、まだまだ時間がある。

さて、どうしようか。

*

仕方ないので近くのファーストフード店で時間を潰すことにした。ハンバーガーを片手に、これからどうするか考え込む。

隼人の家、喫茶店、陽子の家…。その他色々考えは浮かんた。カラオケ等の遊びも悪くない。

だが、かなり重要な問題点があった。財布に入っているお金がほぼ

ないのだ。元は菜々子に相談しに行ったただけだった。ファミレスでハンバーグを食べたのもギリギリの想定外であった。

残金、1352円。しかもコインケースに入れて行ったので、バスカード、割引券、カードはもちろん入っていない。

菜々子はこれから予定があるって言うていたし、唯一少ない友人もバイトだったり何だりでなかなか泊めてもらえそうな所はない。いや、泊まるどうのこうのよりも私は家の前で母さんの帰りを待たなければいけないのではないか？

母さんは鍵を所持しているのではないか？しかし携帯は持って行っていない。あ、でも私が朝帰りした時、鍵は閉まっていたような。ということは母さんは鍵を持っている。イコール、私はどこかフラフラしていてもいいということなのだろうか。

色んな思考が繰り広げられる中、やはり陽子に頼ろうかという思いがあった。

しかし、あの夢がどうしても邪魔をする。

思い出すと、余計頭の中がぐるぐるした。

まるで嫌いなキャラメルのように。

自問自答は究極の選択

これからどうしよう――。

母さんが心配なのも事実だ。

やはり隼人に相談しようか？

そのことが頭をよぎったけど、もし母さんが出掛けしているだけなら余計な心配を隼人にさせるだけだ。

「隼人いまどこ？」

メールを送信した。

♪

返信が早かった。

「図書館だよ」

とのことだった。

図書館：何でかなと疑問を抱いたけど、疑問はすぐに消えた。

行っていい？と送った。しかし、満席だから、と断られてしまった。珍しかった。隼人なら、良いよって言うてくれてデートしてくれるのに。

本当に仕方ないので、私は近所をうろついていた。

何か良い方法ないかな、と考えてみるけど考えれば考えるほど不安が渦巻いていく。

守の彼女の家は言うまでもなく知らない。守に帰ってきてもらおうと思った。家に入りたかった。

電話をかけてみる。

どうやら守は電源を切っているようだ。

あいつは馬鹿か。

今頃、彼女とベッドの上だろう。昼間から。

そう思うと腹が立ってくる。こちとやら彼氏にデート断られたんだよ、とモヤモヤした。

隼人の家に行こう、と思った。

腹いせに驚かしてやるう。母さんのことよりも自分の愛の方が大切だ、と私は考えた。

図書館が満席だからって来ちゃダメってヒドいじゃないか――。何か理由があるのかも知れない。直感だった。

*

隼人の家はボロい……いや、古い二階建てのアパートだ。

隼人は二階の一番奥の部屋だ。

私は二階に上がった。今にも折れそうなサビで覆われている階段に足をかける。体重をかける度に、階段がギシギシ、と叫ぶ。

足は一番奥の部屋に向かう。

203――、隼人の部屋だ。

そつと、ドアに耳を傾ける。

心臓が何かに刺されたような思いだった。

――留守じゃない……。

隼人は図書館にいる筈だ。実に15前のやりとりである。そして15分で図書館から帰るのは不可能なねだ。

体をドアに密着させる。木製でできているドアとくっついてしまいそうだった。

話し声が聞こえてくる。

一体、誰なの――。

「隼人…」

「何だよ」

「ねえ…」

会話が断片的に聞こえた。

私はもつとドアに耳をくつつけた。体の右半身は、隼人の家のドアに押し付けていた。とくに、右耳。

隼人と女の声だ。何がなんなのか理解できず、頭がこんがらがる。色んな暗い色の毛糸が絡まってぐちゃぐちゃになるような感じた。

「ああん…」

「ほら」

その声がドア越しに私の耳に入った。AV見てるんだよね？そうだよね？他の女の子じゃないよね——。

丸いドアノブを開けようとする衝動に駆けられる。

もし隼人が鍵を閉めていればガチャ、という音が部屋に響くだろう。私は思い切って、ドアノブに手をかけた。数センチ開けよう。そう、3センチだ。出来るだけ音を出さないように、奥の方を握る。

ゆっくり、左に回す。

鍵は、開いていた。

衝撃の事実

数センチ、ドアを開ける。

話声がよく聞こえた。残念ながら私には二人の姿が見えない。女の声の主と一致させるのに時間がかかる。信じられない。

「隼人さ、彼女いるでしょ」

間違いなく、女の声だ。

「…いないよ」

隼人が言った。

え？

「嘘ばかり」

「菜々子しか見えてないよ？」

「あんっ…嬉しい…」

はい？

私はドアをゆっくり閉めた。

先程の声を理解するのに数十秒かったけど、全てを悟るにはそれほど時間はかからなかった。

隼人の浮気相手は菜々子だ。

隼人も菜々子も、私に嘘をつき秘密で会っている。

私はもう一度ドアノブを握った。さっきの要領で回す。

今度は覗いてみた。

右目だけが隼人の部屋に侵入する感じで。

私が見たものは最悪だった。

玄関の奥に、ベッドが見える間取りになっている。

そのベッドの上には隼人と菜々子が裸で抱き合っているではないか。

「カンナなんか隼人は渡さないんだから……」

菜々子は隼人にキスをしながら言った。

「菜々子カワイイ」

確かに隼人が言う。そんな。

バレる前にすぐにドアを閉めた。ボロボロの階段を駆け降りた。走って家に帰った。

両目からは涙がとめどなく溢れ、頬を伝い落ちていく。

大人が走りながら泣く、なんて光景はどうでも良かった。

家の前に着くと、相変わらず鍵は閉まっていた。

シヨックだった。泣きすぎて真っ白になる。

それでも隼人への想いは消せない。胸が張り裂けそうでおまけにトゲが痛いような感覚も消えない。頭のどこかが真っ白なのだ。

しばらく泣いた。

何もしなくても涙は枯れない。

ただただ、あの場面を思い出すと目に大粒の涙が溜まり、いつしか頬を流れている。

昨日の夜、私としたのに。

そのせいで母さんの行方が分からなくなったと言っても過言ではない。

今日の朝、キスしたのにどうして？

自分で問いかけるが答えは出ない。菜々子は今日、彼氏と会うと言っていた。菜々子の彼氏は見たことがある。お金持ちの地味な奴だ

った。金を持っている事が理由で付き合っていると話していた。
なのに…。

「あら、カンちゃん。こんなところでどうしたの？」

母さんの声が、聞こえた。

安心は母の甘い味

母さんがスーツ姿で私を不思議そうに見つめる。

「母さん…」

「ちよつと、コンビニ行こうと思って行ったら昔の友達と再会しちゃって。友達の家で飲んでそのまま寝ちゃってたわ」

「え…」

「心配しなくていいの。泣かないで」

「うん…」

流れてうなずいた。

「さあ、部屋に入りましょう。何か作るわ」

母さんは何事もなく鍵を開けた。優しいこの背中をもう二度と見れないと思っていた。

力が抜けた。色んな意味で。

ソファに倒れ込んだ。

朝にいた時と感覚が違うのは私の心を表しているようだった。

ボーっとしていたと思う。あれこれ考える余裕がないだけだったかもしれない。

考えるほど、物分かりは悪くない。

「ほら、出来たわよ」

気付いたら母さんが皿に乗せて何か持ってきた。

何だろう、と皿を覗いた。

ホットケーキとかいうやつだった。

「おいしいから」

母さんがニコツと笑う。

無論、苦手な分野に入る食べ物だ。

「うん」

折角、作ってくれたからうなずいた。この感じは久しぶりである。恐る恐るフォークで切り、口に運んだ。

「どう？」

母さんは私の感想を待つ。

どうもこうも、甘くて不味い食べ物に決まってるじゃない――。

「あつ」

思わず声が出た。

「ふふ」

次は母さんがニツと笑う。

「そのホットケーキはシロップをかけてないの。バターだけを塗ったホットケーキ」

「母さん……」

「カンちゃんは、私に似て甘いものが嫌いだからね」

覚えていてくれたんだ……と心が温くなる。母さんはそのことを正直、もう忘れたと思っていた。

「ありがとう」

ふいにつぶやいた。

「いいのよ」

母さんは、ニコニコ笑っている。何故、こんなに優しいんだろう。何故、こんなに笑顔でいれるんだろう。不思議だった。

母さんが作ってくれたホットケーキの生地は、ほんのり甘かった。

*

浮気相手

23:00

私は部屋で何となく携帯をいじっていた。データフォルダを眺めていると、隼人が作った、喫茶店「優香」のショートケーキの画像が目についた。

陽子と店に行ったとき撮ったものだった。

私は前、隼人にこんな質問をしたことがある。

「どうして喫茶店の名前が女の人の名前なの？」
そう聞いたら、「知らない」と言われた。

隼人の本当に好きな人の名前だろうか？と、今だから考えてしまう。

次はアドレス帳を整理しようと思った。

気付かないうちに登録数が増えていてビックリした。

“菜々子”

その名前を見て、考える。

本来なら菜々子は、私は彼氏がないと思っている筈だ。

ファミレスでの会話で、「カンちゃんの良いダンナ見つかるんだろ
うな」、みたいなことを言われたからだった。

なのに隼人の前では“カンナには渡さない”などと言っていた。

…大体想像はつくが。

おそらく菜々子は隼人と私が二人きりでデートしているところを目撃したのだろう。

菜々子の番号に発信した。

呼び出し音が鳴ると同時に鼓動が高まるのが分かる。

『はい』

菜々子が出た。まあ当たり前の事なのだが。

「もしもし」

昔ながらの“もしもし”を口にしてみる。

『どうしたの?』

私は思わず拳に力を入れる。
用件などないからだ。

「いやっ…今日はありがとう」

『ああ、いいのよ』

優しい口調で菜々子は言ったが、なぜか迷惑そうに聞こえたのはきつと私だけだと思う。

「今日は何してた?」

まるで菜々子の彼氏のような台詞だな、と我ながら感じた。

『彼氏と遊園地よ。もちろん向こう持ちでね。金持ちのこいつと結婚しようと思っただわ』

菜々子は嘘をついた。

いつもの私なら、素直に受け入れ、そして羨ましがっていたことだろう。

「へえ、良いなあ」

一応いつものように羨ましがった。

『ホントにそんなことないよ』

ふつと菜々子は否定した。

「その彼氏とHはした？」

言ってやった。

『え、ああ……』

狼狽える声が聞こえてくる。
ざまあ。

『18:00には彼氏の家に行って……そのままよ。で、さっき無理矢理帰ってきたの』

「その彼氏のことスキ？」

私の質問攻めに戸惑う様子だった。

『まさか。あり得ないわ……お財布代わりよ』

私の……私の最愛の人はお体の相手ですか。そう思った。

「ははっ、さすが菜々子！」

『……………』

何か言えよ。

「じゃ、また」

私が一方的に切った。菜々子は完全にアリバイを作っている。

もう何だか、菜々子がつざっ
たい。

女心からのピンチ（前書き）

今回、ちょっと長くなりました。

女心からのピンチ

私は、隼人の家の前にいた。
203と彫られている。

ずいぶん前から彫られていたようだ。

私はカバンから合鍵を取り出した。

この前、菜々子に電話した後、すぐに隼人にメールをした。
電話だと上手くしゃべれる自信がなかったからだ。

「隼人いま忙しい？会いたいよ」
という内容で送った。

返信だけは相変わらず早く、

「ゴメンなあ、バイト中（汗）」

予想通りの返事だった。

「合鍵作っちゃダメ？私、このままじゃ不安で死んじやいそう」
送った後少し無理があるな、と思ったけど仕方ない。

「合鍵かあ」

と隼人は困っているようだった。だからと言って言い訳も思いついていないみたいだ。

返信しなければいい話を、彼女彼氏の縛りが邪魔して返信はしてくれている、そう解釈した。

「ダメな理由があるの…？」
わざと5分遅れて送信する。

「あるわけないだろ。カンナだけ愛してるんだから」
私の胸が苦しくなる。

複雑な思いを抱えながらこう返信した。

「ありがとう！じゃあ、合鍵作るね？」

それから2回ぐらい、隼人に会った。セックスはしなかった。それどころかキスも、愛の言葉すら交わしていない。

隼人は戸惑っていたようだけど私はあえて無視した。
ただ鍵の用件だけを話して帰った。

そんなこんなで、私は隼人の家の合鍵を持っている。

堂々と鍵を差し込み、中に入った。

目的、それは“証拠”を見つけるためだ。

もしかしたら隼人は菜々子以外にも浮気をしているかも知れない。

それと、浮気の件に関してもっと知りたい気持ちもあった。

相手がどんな女のコなのか。

相手からどんなプレゼントをもらっているのか。

多分、証拠隠滅しているだろう。私が隼人の家に呼ばれるということはやましい物がない自信が溢れているからなんじゃないか。

考えながら私は一番にベッドの下をチェックした。

何もない。

菜々子と隼人は間違いなくこのベッドで――。

泣きたくなる気持ちを我慢して、タンスを開けた。

女のコがいるような雰囲気は全くない。

何度も来ている隼人の家も、何だか初めてくるようだった。

机の上には6個のラッピングされているお菓子らしき物がおいてある。

どれも可愛いラッピングだった。1つ手にとってみた。

その中はマフィンとかいうお菓子だった。

どっかで見たことあるような――。

疑問を感じながら他の所を探索する。女のコの私物の1つでも落ちていたら、隼人と別れる道も視野に入れようと決心していた。

隼人のことは好きだ。

本当に愛している。

だけどこのままじゃ私は一生、浮気する隼人を追いかけることができない。

そんなの、幸せを感じれない。

第一、私はまだ若い。

フリーターだし、まだまだこれからなのだ。

「浮気する彼氏」というレッテルが頭の中で回る。

目を閉じてみる。

落ち着かない。

やっぱり隼人しか愛せない気がした。

ずっと一緒にいたいと思った。

だけど、隼人は私じゃ足りない。私が魅力不足らしい。

浮気相手の魅力に私は勝てるんだろうか。

もう一度、ベッドの下を確認した。仕方ないからエロ本でも見つかればいいんだけど。

さつきは気づかなかったけど、奥の方に何かある。手を伸ばしてみる。

それは何だか冷たかった。

ベッドの下から出してみると、それは小さな金庫だった。お金が入っているんだろう。

一体、いくらくらい稼いでいるんだろうか。

気になった。

それは私がフリーターだからかも知れない。

開けようとするけど、開かない。ロックがかかっている。

三桁の番号。

すぐに隼人の誕生日、315に会わせてみる。

違うようだ。

私の誕生日は四桁だから、論外である。

彼氏の稼ぎに対してこんなに必死な彼女こそ論外なのかも知れないが。

15分くらい経っただろうか。

適当にいじっていると、開いた。その間、随分時間が長く感じた。

開けた瞬間だった。

ガチャガチャ、という音が響いた。

隼人が帰ってきたのだろうか。
しかし今の時間は“優香”で働いている筈だ（それを見計らって、侵入したのだから）。

合鍵で勝手に入るのはあり得ない気がしてきた。
普通、許可をとって入るのでは――。

考えてる暇はなかった。

反射的に、押し入れの中に隠れた。

押し入れなんて、何年ぶりに入っただろう？多分、小学生の時にかくれんぼで入ったつきりだ。

押し入れの中は、当然暗い。

真っ暗で何も見えない。

ボタン、と音がした後、カチャ、という音がした。
どうやらドアを閉めて鍵もかけたらしい。

息を潜める。

緊張と好奇心が体を走る。

押し入れの中の暗さにも慣れてきた。

その時、部屋に入ってきた侵入者が女だと分かった。

靴の音がヒールだったからだ。

侵入者は鍵に鈴をつけているらしく、その鈴の音がまた憎たらしい。

誰？

その思いが強まる。

一体、なぜ隼人の家に来ているんだろうか。

もしかして隼人がこれから来る、とか。
そうなれば押し入れにいる時間は長くなるだろう。

女はベッドの上に座ったようだ。ボスッ、と寝転がる音がそうだった。

一体誰？

女と分かり、余計また鼓動が高くなる。

ふすまを三センチ開けようとした。大丈夫だ、多分。

ほんの少し開けた。

開けるまでいかないくらいに。

ベッドから足がはみでている部分しか見えない。

綺麗な脚――。

私は押し入れのふすまを閉めた。謎は逆に深まるばかりだ。

「あぁん……」

その時、女の喘ぎ声が聞こえた。かなり衝撃的だ。

人の部屋につかつか入りこんで自慰行為に励むなんて衝撃の他ない。

もっとも、つつか入りこむのは私もなんだけど。

一層、女が誰なのか、もしくはどんな女性なのか気になるばかりだ。

電話相手、浮気相手

その人の手が激しくなっていくのが声で分かった。

まさか女性のプライパシーを、こんな彼氏の押し入れの中で覗くとは思いませんでした。

おまけにその女性は浮気相手である。

粘っても仕方ないので、もう少し開けてみることにした。

また衝撃が走る。

陽子。

少ない友達の中で、一番の友達だった。親友だった。

色々なことが頭の中を巡る前に、押し入れのふすまを全部閉めた。

閉めたら再び、真っ暗になった。

私みたいに。

親友がいま同じ部屋でオナニーをしていること。

親友が彼氏の家の鍵を持っていたこと。

彼氏の浮気相手は菜々子だけじゃなかったこと。

彼氏は私の友達を家にあげていること。

事実が飛び舞うと同時に、色んな感情が胸で戦争をしているようだった。

その証拠に涙が止まらなかった。

こんな所で泣くのはすねた子供みたいだな——そんなことを思いながら。

声を押し殺して泣いた。

そういえば、つい最近も目が痛くなる位泣いた気がする。

あれは確か、菜々子が隼人と…

考えるのをやめた。

思い返せば、また傷が深くなる気がしたからだ。

私には何分経ったのか分からない。

ふいに着メロが鳴った。陽子の携帯からだった。

どうやら電話だったようで、陽子が喋りはじめる。

「あ、もしもし！隼人？」

陽子の声はかなり高くなった。こんな状況でも、陽子の可愛さは認めざるを得なかった。

「ん？うんうん」

電話相手の声はさすがに聞こえなかった。

ガツカリしたが、仏様は本当にいる。

陽子がスピーカーにしたのだ。これで電話相手との会話が聞こえる。

押し入れの中の私は、相変わらず音を出さない様に盗み聞きをする。

『…でさー、今度遊園地行こうよ？誠司もよんでさ』

陽子に電話をしたのは隼人だった。

そこでまたショックを受ける。

あれほど泣いたのに、まだ頬に涙が伝う。

「カンナも呼ばなきゃダメよ。私はそんなWデートはできない」

一体何の話だろう。しかし、陽子が私の味方なのは何となく理解で

きた。

『菜々子も同じこと言ってた』

隼人の笑い声が電話越しに聞こえた。いや、押し入れ越しに。

「でしようね。だってカンナは良い子なんだよ」

『そりゃあ俺にも分かるけど。誠司が言うんだよ。菜々子と、誠司と、陽子と俺でWデートしたいって』

「誠司くんそんなこと言ってたの？もう。…ってあれ、ってことは私と隼人なの？」

『そんなところ』

「嬉しいな」

菜々子も私の味方だと思って、嬉しいと思った。

それもすぐ消え、陽子の一言が胸に刺さる。

憎いとか、殺意とかじゃなくて、弱い私はただ泣くしかなかった。

『ははっ、陽子は良い女だよな』

「冗談が激しいのね」

『本音だよ。また抱かせて』

「しょうがないなあ。いいよ。今隼人の家で…その…」
『なんだよ』

隼人の厭らしい笑いが聞こえる。

「やっぱ、なんでもない」

『言えよ』

「ヤダ…」

『言えって』

私の知らない隼人が陽子の前にいる…。そんな気がした。

胸が苦しい。

「一人で…してた」

陽子の照れる声。

『可愛いな。菜々子よりもカンナよりも可愛い』

私の涙は止まらない。

手で口を押さえた。

「嘘はダメって何回も言ってるでしょう?」

『嘘じゃないって。今すぐ会いたい…』

「ん?」

『会いたい。今すぐ来て』

「私も。今すぐ行くね」

そう言って、陽子は携帯をしまい、立ちあがったようだった。

「カンナ…ごめんね」

陽子は言った。

親友が「1番」

もしかしてバレていたのだろうか。

最初から私がここにいることを知っていたというのだろうか？

私の靴はちゃんと靴箱に隠してあるし、陽子がベットに向かうまでにそんな靴箱をチェックする時間などなかったはずだ。

「なんてね……」

陽子の声はそれっきり聞こえなくなり、ボタン、とドアの閉まる音が聞こえた。

ようやく隼人の家には私だけになった。

良かった、独り言だったみたいだ。

私は押し入れから出た。

空気がおいしかった。

私は、陽子が来る前の事を思い出した。

そういえば、ベットの下にある金庫をいじっていたのだ。

適当に3桁の番号をいじっていると、的中して金庫が開いたが、その瞬間に陽子が鍵を開けたので、私は肝心な金庫の中を見れていない。

ベットの下に金庫があった。

その番号を見て驚いた。

“217”

陽子の誕生日だった。私の誕生日は4桁だから、なんとも言えなかった。

中を開けてみる。
一体、いくら稼いでいるのだろう。

金庫の中には、お金ではなく陽子の写真が30枚ほど保存してあった。

私の写真など1枚もない。

その写真を一枚ずつ確認した。次の写真を見るのに、キリキリと胸が痛む。
体が震えるのが分かった。

15枚ほどが陽子のヌード写真やSM写真だった。

映っている陽子は感じている顔をしたり、悦んで撮影されているようだ。

ポーズは隼人が命令しているのか、それとも自分からとっているのか分からない。

エロ本並に過激なことは確かである。

私は何度もショックを受ける。

その中に菜々子と陽子がツーショットで撮られている写真があった。
菜々子と陽子はやはりベットの上で裸になっている。

ということは3Pでもしたんだろうか？

冷静に考えられない。

菜々子も陽子も、隼人の女なのだ。

しかも2人共が「自分が1番ではない」事を承知の上、このような事を行っている。

あり得ない。

私はそう思った。

後の写真は陽子の純粋な写真だった。

まるでプロマイドかと思うほどの表情で陽子は映っている。

本人の承諾を得て、写真を撮っているのだろう。
金庫に隠すなんて…。

私は金庫をベットの下にしまい、足早に隼人の家を出た。

今日は色々なことがありすぎた。

家に帰ってすぐに寝ようと思って、「彼氏」の家を見上げた。

*

「あら、カンちゃん帰ってたの。ご飯は？」

お母さんが心配そうに、ソファで横になっている私に声をかけた。
よほど暗い雰囲気だったのだろう。

「…いない」

この状況で食べれる方がすごいと思う。

「そっか」

お母さんは私をそっとしておいてくれた。

30分が経ったと思う。

携帯が鳴った。

“陽子”

と表示されていた。

<t;kiss>

陽子の名前が液晶に表示されている。
出たくない。

喋れる自信がない。
だけど逃げるのはもっと嫌だ。

私は震える親指で通話ボタンを押した。

「…もしもし、陽子。どうしたの？」

いつもと同じを装い、知らないふりをする。

私は陽子も隼人も好きだ。

だから、縁は切りたくない。

またやり直せるから…そう思う。陽子は大切な友達で、それに変わりはない。いつか許せる。思い込んでも、この気持ちは変わらない。
“どうして”？

『今度さ、遊園地行こうよ？』

陽子はいつもと変わらない。

「あっ…うん、良いね」

私は明らかにいつもと違うだろう。

『でしょ？それでさ、菜々子と隼人と誠司くんと私とカンナで行こうって話よ』

陽子は楽しそうに話す。それは隼人が来るからだろうか。

「あはっ…誠司くんかぁ。懐かしいな」

岡本誠司は高校時代の友達だ。いや、今度の遊園地に行くメンバー

「は高校時代の部活で一緒だったメンバーだ。しばらく連絡を途絶えていたが、つい半年前からご飯に行ったりするようになった。」

『カンナはそうなるかもね』
ふいに陽子が言った。

私は誠司くんが苦手だ。

整った顔立ちは多分隼人よりカッコイイだろう。だが彼は昔から大人びていて、私はよく分からなかった。どうも中学の時に童貞を卒業しており、遊び人の割にはお金持ちだ。高校時代では内緒でタバコを吸っていた。ここまではただの不良だと見えるかも知れない。

しかしそれらが似合う男なのだ。ちよっと背伸びをしたピアスも誠司くんを引き立てている。

ふいに吸うタバコも、煙をはくときの横顔は素敵だと思う。

そんな所が苦手である。私にはどうも合わない。そんなこんなで、私だけ誠司くんにあまり会っていない。しかもフリーターという重荷を背負っているのです。

「まあ」

私は適当に答えた。

『ふふ、じゃあまたね！待ち合わせ場所はメールで知らせるね』

「うん、じゃあ」

通話が終了すると、私は少し嬉しくなった。

隼人に会えると思えば胸が踊る。今度のデートで魅返してやればいい。

それだけの話だ、と考えた。

「カンちゃん、ちょっとお醤油買ってきてくれるー？」
奥から母さんの声が聞こえる。

「いいよー」

私は向こうの台所まで聞こえる大きな声で言った。

簡単に行く準備をして、外に出た。

空を見上げてみる。

曇っていて、灰色の空だった。雲はなんだか厚くてグレーにも見える。

汚い空でも気分がスカツとする。

私は大股でスーパーへ向かった。気付かないうちに外は冬に近づいたものだ。

喫茶店“優香”が見えた。

隼人、いるかな――。

ガラス張りになっている所から覗いてみた。

隼人と陽子が楽しそうに会話しているじゃないか。

目を疑った。

しかし目の前の現実是不変ならない。隼人は作業着で、陽子が私服。

しかもあれがブランド品だということが女の私には分かった。

隼人に会いに行くのに、良い服を着ていく。

私は勝手にそう捉えた。

いや、実際にそうだろう。

二人は楽しそうに会話をしている。作業着の店の奴が客と会話。信じられない。そう思う。

その瞬間、隼人が陽子の頬にキスをした。

陽子の顔は恋する少女のように、頬が赤くなる。

体だけの関係じゃない…。

それは何となく分かった。

しばらくそこで様子を見ていた。動くエネルギーが湧いてこない。

陽子と目が合った。

陽子の目が後悔に変わるのが分かった。

私が睨んだからだ。

走って、家に帰った。

変わらぬ想い

それにしても酷いだろう。

私は単に体だけの関係で、お互いにとってお遊びかと思っていた。その時点私の心は引き裂かれており、増して密会して楽しく会話までしているとは思ってもよらず、陽子への対する感情が変わっていった。

しかし大好きな親友を嫌いになるのは難しい。

隼人に出会う前からの友達だからだ。

「隼人にとって私のフェラは下手だった」こんな感じで適当に思い込んでいた。

「私」自身は愛してくれていると思っていた。

よく考えてみれば、あの金庫の写真は陽子ばかりだった。（中には菜々子とマニアックなツーショットもあったが）。

笑顔の陽子が写っているあの写真は確かに純粹だった。

あれだけだとプラトニックにも見える。

隼人は私の写真なんて一枚も持っていない。携帯にも私の画像はないだろう。

「持っていない」ではなく「要らない」んじゃないだろうか。

そう考えると、怖くなった。

陽子、酷い――。

そう思うようになった。

隼人ではなく、陽子に対してだ。

しかし、完全に陽子を嫌いになることはできず、隼人のことも愛している私だ。

*

「カンちゃん？」

夕飯を食べながら、母さんは心配そうな顔をする。

娘がおつかいで頼まれた品を買わずに帰ってきただなんて小学生みたいな真似をしたんだから、（小学生もしないだろう）何かあったのかと思うのは当たり前かも知れないけど。

「…いや…」

自分でも、驚くほど小さな声だった。母さんは言いにくいことだと悟ったのか、白米を口に運びながら、

「人を許して自分を受け入れるのよ」と言った。

それ以上、何も言ってこなかった。

「ご飯、もういい…」

私は言って、立ち上がった。

母さんはうなずいてくれた。

自分の部屋に戻ると、涙が流れた。

陽子を許して、魅力のない私を認め、受け入れる。

そして新しい男性を探す――。

そう聞こえた。でもそういうふうに思おうとすると余計涙が溢れる。

新しい男性を探す。

無理だと思った。私には隼人しかない。

母さんだって父親が亡くなっても男に気がないように見える。

どうすればいいのだろう。

ベッドに身を投げると、菜々子と隼人の、あのシーンが頭を流れた。

そのまま眠りについた。

最悪と最高の狭間は今

遊園地に行く日がやってきた。

どんなに頑張っても時間は待ってくれないらしい。

隼人と陽子は愛し合っている気がしてきた。なのに、何故私と付き合っているのだろう。

不思議で仕方がないが、別れるよりは良い気がする。

待ち合わせ場所は“優香”だ。

誠司くんと菜々子と隼人がいた。どんな顔をして会えばいいのだろう。

「もしかしてカンナ？」

誠司くんが言った。

「…うん」

そういえば、誠司くんはWデート希望だったのに私が乱入してしまい、機嫌が悪いと思ったけどそうじゃないみたいだ。

「へえ…」

誠司くんは、はっきり言って変わっていた。ワイルドな雰囲気は消え、普通の大学生のような格好だった。しかしイケメンなのは変わりがなかった。

「久しぶり」

私は頭を少し下げた。

「うん」

誠司くんが微笑んだ。
良かった。

「あれっー、そこのお二人さんはイイカンジですかい？」
菜々子がニヤツとする。女の可喜しいカバンが膝の上に乗っている。

「ばかつ。俺のカノジョだし」
隼人が言った。

複雑な気持ちになりながらも、

「そうですー」
と言った。

そんな掛け合いをしていると、陽子が来た。いつもより気合いが入っているように見えるのは私だけかも知れない。

「遅れてゴメン！」
陽子が私の隣に来た。

「いいよ、いいよ」
4人共口を揃えて言った。ふいに隼人を見つめる。隼人は笑っていた。

「あつ、そうそう！」
陽子が高そうなカバンから何かを取り出す。

「おつ、マフィン！」
誠司くんが嬉しそうにしている。どうやら甘いものが好きらしい。
「そうよ！皆の分、作って来ちゃった」
そう言つて、菜々子と誠司くんと隼人に渡した。

「へえ、ありがとう。美味しそう！相変わらず、女のコらしいね」
感心したように菜々子が言った。やられた！というふうにも聞こえる。

「菜々子には叶わないよ。ラッピングも雑だし。…あ！カンナは、これ」

そう言って陽子がくれたものはティディベアだった。

「カンナ、まだ甘いもん食えないんだ？」
誠司くんが聞いた。

「うん。ティディベア…カワイイ！ありがとう」

「いいえ」

陽子は可愛く笑った。いつも通り、いつもの優しさ。なのにそれが全てじゃないだなんて、私は知っている。

私は思い出してしまった。
あのマフィンのラッピング。

隼人の家に侵入した時に、ちょっとシンプルなマフィンが置いてあった。それに疑問を抱いたのは、陽子の家で昼食を作った時、引き出しの中に、マフィン用のラッピングセットが入っていたのだ。ということは、陽子は菜々子や誠司くんよりも先に隼人へ渡していたのだ。もしかしたら、マフィンの出来を喫茶店で働いている隼人の意見を聞きたかったのかも知れない。でも隼人はこの場でも、もらっている。

皆、平等――。

そう思わせるためだろうか。

だけど、私は甘いものが嫌いであつたと思つてゐる。もしマフィンを受け取つてしまえば、切なすぎてどうしようもなかつたからだ。

現地に着くまで、私の頭の中は陽子と隼人のことだけだつた。

菜々子はやはり優しく、いつもと変わりはなかつた。

私達は入園した。

ここから、私の運命が変わるなんて、夢にも思わないだろう。

最悪を切り裂く風はb i t t e r

遊園地では様々なアトラクションに乗り回し、昼食を終え、またアトラクション。

乗り物に乗るときは、隼人と私が隣、菜々子と誠司くんが隣同士、陽子が1人、の順だった。ローテーションすることなく、自然にこの順番になるのだ。意識しているのは私だけである。

隼人とは、本当にいつも通りだった。気付かないふりで精一杯だったけれど何とか可愛い笑顔を作りきった。

時刻は15:00を回った。一息しよう、ということで園内のクレープ屋で過ごすことになった。

白くて丸いベンチに座り、雑談をする。

「菜々子って結構、体力あるね」

誠司くんが笑いながら言う。

「まあね」

得意気になる菜々子に、隼人が「おい」とツッコむ。

「ずっと文化部なのにね」

と私が言っていると、笑い声が聞こえて、

「マジかよ！野獣だな」

と誠司くんが言った。

陽子は笑いながら、「美女だから」と口をはさむ。

——こうしてれば、普通の友達、なのに……。

談笑していると、

「俺、トイレ行ってくるわ」と隼人が言った。

「あ！私も」

陽子も立ち上がった。

「りょーかい！」

「うん」

誠司くんと菜々子が言った。

ちよつとした沈黙が流れた後、私は携帯を開いた。

「あ！電話来てる。ちよつと待ってて」

「うん」

菜々子がうなずいた。誠司くんも分かった、という顔をしている。

トイレへ向かった。二人の姿はもう見えない。

着信先は母さんだった。

化粧室で、電話をかけてみる。

電源が切れているようで、かからなかった。全く、何なんだろう。

何故か、胸騒ぎがした。

二人揃ってトイレ、ということに疑問を感じた。普通のことかも知れない。でも、私たちの関係は普通じゃない。

女子トイレから出た。

菜々子さんがいるテーブルは、距離として離れており、化粧室の入口すら見えないぐらいの位置にある。

女子トイレに異常はなかった。男子トイレに陽子が入り込んでいる

とか？さすがにそれはないだろう。

第一、トイレに二人して逃げたとは限らないのだ。そう考えれば、「トイレに行く」というのは100%嘘であろう。わざわざトイレに行かなくても、二人きりでいられる場所はいくらでもある。ましてトイレなんて、バレるリスクが高すぎる。あり得ない。

私はちよつと考えた。

直感で思いついた。

人の多い遊園地で二人きり、密室になれる場所。

私は、今とは違う場所の化粧室に、駆け足で向かった。

――車椅子用トイレ。

ここなら、広々としており、もちろん鍵付き。

菜々子達が座っているテーブルからは、私が電話を確認した化粧室より、車椅子用のトイレは離れている。

正確には、化粧室に車椅子用、男性用、女性用と設置してある。

私は、車椅子用のトイレを確認した。誰が入っているようで、赤マ
ークが目にはいった。

耳をすませば声が微かに聞こえる。しかしたくさん音に掻き消されていく。こんな所で、耳をすます人なんて誰一人いない。私だけだ。

障害者用のトイレなんて、誰も見向きもしない。

私は懸命に耳をすました。

車椅子用のトイレのドアに、背中をギリギリまで近寄せる。もちろ

ん、音をさせないように。

「あつ…ダメ」

「良いじゃん…折角会えたんだし…」

隼人と陽子の声だ。

ビンゴだった。よっしゃ！と少しだけ思ったのも束の間、すぐに泣きたくなった。

話は全て本当だった。

それから、話し声が聞こえた。

しかし小声で、しかも耳元で喋るような小さな会話だったようで、聞こえない。

断片すら聞こえなかった。

「こんな所で、ダメ…」

やっと聞こえたと思ったら酷い声だった。

「いいだろ…陽子近くにいいのに…手も繋げない…はあ…んっ…」
隼人を感じさせているのは言うまでもなく陽子だ。

「何言ってるのっ…。カナナ幸せにするから、こんな関係許可してるんだよ…勘違いしないで…っああん…」

陽子…。

それは彼女なりの優しさなのだろうが、そんなの優しさでも何でもない。

「分かってるよ…。でも俺、陽子が一番好きなんだよ…ホントは分かるだろ？…ハア…」

「私も愛してる…」

涙は不思議と出なかった。

意思とは別に拳を握りしめていた。

「好きだっ…陽子…ああ…」

隼人のその声は、本当に何とも言えなかった。

私はもう聞かずに、走ってテーブルへと向かった。
風を切り抜ける時、また切なくなった。

――何で？

――どうして？

――酷い…！

――信じたくない。

色々な思いが交差するのが自分でも分かった。

菜々子たちのいるテーブルが、遠くから見える頃、私は疲れたので歩いた。

――菜々子と誠司くんがキスをしていた。

キスは短く、すぐに終わった。

唇が触れたくらい。

誠司ちゃんと菜々子は隣同士に座っているので、横顔と横顔がくっついていて私を見たと感じた。

私はまたショックを受けた。

死にたいという文字が脳裏をよぎる。

重い足取りで、テーブルへ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7551y/>

砂糖と雑巾

2011年11月30日20時53分発行